

## P. B. シェリーの作品に見られるメスメリズムについて

## Mesmerism in P. B. Shelley's Poetry and Prose

望 月 健 一

MOCHIZUKI Ken-ichi

## 1. はじめに

「メスメリズム」(“mesmerism”)は、フランスのパリで動物磁気催眠治療法(動物磁気療法、メスメリズム)によって一大センセーションを巻き起こしたオーストリアの医師フランツ・アントン・メスマー(Franz Anton Mesmer, 1734-1815)の名に由来する。また、ほぼ同時期にイタリアでは医学者・物理学者ルイジ・ガルヴァーニ(Luigi Galvani, 1737-1798)が「動物電気」の実験を行っていた。彼は、空に稲妻が光った時、あるいは近くにあったライデン瓶からたまたま火花がとんだ時、切断された蛙の腿の筋肉が収縮することを発見した。

そのおよそ20年後、スイスのレマン湖を望むディオダティ荘での所謂「ゴースト・ストーリー・セッション(「ゴシックの夜」)で、G. G. バイロン(George Gordon Byron)、その侍医ジョン・ポリドーリ(John Polidori)、パーシー・ビッシュ・シェリー(Percy Bysshe Shelley, 1792-1822 以後「パーシー」と略記)、メアリー・シェリー(Mary Shelley)らが、ガルヴァーニの理論をもとに、一度ばらばらになった動物や人間の体の部分を寄せ集めて再生させる可能性について論じていた。この電気による生命の復活という仮説にヒントを得て、メアリー・シェリーは『フランケンシュタイン』(*Frankenstein; or, the Modern Prometheus*)を書いた。当時においては、このゴシック小説に登場するような怪物を作り上げることは決して考えられないような話ではなかったのである。一方、夫パーシーの詩作品には、新しい生命創造のアイディアこそ見られないものの、メスメリズムの技法が見られることが、既にカール・グレイボーによって指摘されている。<sup>1</sup>

本稿では、パーシーの「女催眠術師から患者へ」(‘The Magnetic Lady to her Patient’)、『縛を解かれたプロミーシュース』(*Prometheus Unbound*)、『アトラスの魔女』(*The Witch of Atlas*)、『生の凱旋』(*The Triumph of Life*)等の作品を取り上げ、そこに見られるメスメリズムの諸相や作品全体の中でなう機能について考察

を加えてみたい。

## 2. メスマーの動物磁気療法

18世紀のヨーロッパでは、3つの種類の磁気力が存在すると考えられていた。即ち、1. 「岩石磁気」(“mineral magnetism”)、2. 「宇宙磁気」(“cosmic magnetism”)、3. 「惑星磁気」(“planetary magnetism”)である。メスマーは、これら3つの磁気力の他に、人間や動物の体を動かす4つ目の磁気力があると考え、これを「動物磁気」(“animal magnetism”)と呼んだ。この名称は、“animal”の語源であるラテン語の“animus”に由来する。“animus”は、英語で“breath”(「生命、呼吸」)の意味である。つまり、「生命、呼吸」を持つすべての生き物は、この「動物磁気」の力を持つとメスマーは考えたのである。

当時は、動物磁気療法は一種の疑似科学と見なされていた。もっと正確に言うならば、メスマーの理論は、原始的な精神療法が次第に精神分析に変わっていき、信仰治療がキリスト教科学に合流し、古代の迷信が心靈主義や超心理学と溶け合うあたりに位置していたのである。<sup>2</sup>

メスマーの動物磁気療法により、多くの患者の病気が回復したり症状が軽くなったりした。しかし、パリの世論は、彼のことを偉大な科学上の発見をした人物と見る者と、いかさまの医師と見る者との二分された。メスマーは、医師シャルル・デスロン(Charles d'Eslon)の勧めもあって、自分の理論を『動物磁気の発見に関する覚書』(*Mémoire sur la découverte du magnétisme animal*)という著書にまとめ、そこに27の命題を添えた。<sup>3</sup> 1784年にルイ16世の命により、科学アカデミーの9人のメンバーが動物磁気の調査を行なったが、彼らはメスマーが提唱する新しい物理的な流体が存在するという証拠はないとの結論に達した。もし、その治療がうまくいったとしても、それは想像力のおかげであるとの見方が示された。

次にメスマーの治療方法であるが、彼は、一対一の治療では患者と向かい合って自分の両手で患者の両手の親指を押し、患者の眼をじっと見つめた。それから、手を患者の肩から腕にかけて動かしたり、横隔膜の下あたりを指で押したりした。また、メスマーはグラス・ハーモニカの名手で、よく治療の最後に曲を演奏した。ただし、グラス・ハーモニカは当時、死をもたらす楽器として正式に使用を禁止されていた。

しかし、毎日多くの患者に対応する必要性に迫られた彼は、器具を使った集団治療方法を考案した。これは、患者達が磁気桶の周囲に座って棒と綱を握り、自分達の眼や手足に磁気流体を引き寄せるといった仕組みになっている。即ち、患者達が集まって磁気の鎖をつくり、他の人の「極」と接触することによって、磁気流体を循環させることができるように工夫されていたのである。また、メスマーは飲み物を使った治療法も試みた。患者に鉄を含んだ調剤を飲ませ、患者の体のあちこちに磁石を取り付けたところ、患者は体の中に不思議な液体が流れるのを感じ、数時間の間、病状から開放されたという。

以上、要約すると、メスマーの動物磁気療法で使用されたものは、体では眼と手、器具としては、バケツ (baquet) と呼ばれる磁気桶、棒、綱、飲み物 (磁気水)、そして音楽を演奏するための楽器ということになる。

なお、メスマーは、モーツァルト (W. A. Mozart) の肩こりを治療し、彼のパトロンとして彼の一幕物のオペレッタ『バスティアンとバスティエンヌ』 (*Bastien und Bastienne*) K.50 (46b) をウィーンの自分の邸宅で上演したことで有名である。<sup>4</sup> また、モーツァルトの歌劇『コジ・ファン・トゥッテ』 (*Così fan tutte*) K.588 には、動物磁気療法やメスマーの名前への言及が見られる。<sup>5</sup>

メスマーの理論と実践の延長線上にあるのが、フランスの磁気療法師ジェームズ・ブライド (James Braid, 1795-1860) の催眠術である。『オックスフォード英語辞典』 (*The Oxford English Dictionary*) によれば、“hypnotism” (「催眠術」) という語が初めて使用されるのは、1842年のことである [ , 568 ]。そして、メスマーの名前は、“mesmerize” (「催眠術をかける」) という語の由来となった。

本稿では、用語の省略、説明の簡略化のために、「動物磁気催眠療法」を「催眠術」、動物磁気催眠療法を行う者を「催眠術師」と呼ぶ。ただし、「動物磁気」に関しては、この名称をそのまま使用する。

### 3 . パーシー・シェリーと催眠術

パーシーに対して催眠術による治療を行った人物としては、トマス・メドウィン、ジェーン・ウィリアムズ、メアリー・シェリーが記録に残っている。<sup>6</sup> 特にメドウィンは、彼がパーシーに催眠術をかけた時の様子を次のように述べている。<sup>7</sup>

I had seen magnetism practiced in India and at Paris, and at his[ Percy Shelley's ] earnest request consented to try its efficacy. Mesmer himself could not have hoped for more complete success. The imposition of my hand on his forehead instantaneously put a stop to the spasm, and threw him into a magnetic sleep, which for want of a better word is called somnambulism.

私は、インドとパリで動物磁気療法が実践されるのを見てきました。そして、彼 [ パーシー・シェリー ] の真剣な要請により、私はその効力を試すことに同意しました。メスマー自身も、これ以上の成功は望み得なかったことでしょう。私が彼の額の上に手を置くと、直ちに発作が治まり、彼は磁氣的睡眠状態にはいりました。それは、他にいい表現が思い浮かびませんが、夢遊状態とでも呼ぶべきものでした。

メドウィンがパーシーにかけた催眠術は、メスマー自身も驚くであろうと思われるほど効果があったようである。ただし、メドウィンがシェリー夫妻のいたイタリアのピサ

に到着したのは1820年10月のことなので、この引用箇所に記載されているメドウィンの手によるパーシーの治療は、それ以後のことになる。

それ以前にパーシーが催眠術を知った可能性があるのは、本稿の冒頭で触れた1816年6月半ばの「ゴースト・ストーリー・セッション」である。この時、当時スイスにいたバイロン、ポリドーリ、シェリー夫妻らが、ガルヴァーニが発見した動物電気で新しい生命を誕生させる可能性について論じ合ったことが、メアリーの『フランケンシュタイン』の1818年初版の序文に記載されている。バーバラ・C・ジェルピによれば、この時にパーシーは、夢遊状態（somnambulism）についてポリドーリと話をしている。夢遊状態は、その当時のポリドーリの論文のテーマであった。しかも、ポリドーリは、その数日前にジュネーブのオディアー博士を訪れ、夢遊状態に関する問題について話し合ったという。<sup>8</sup>

本稿で取り上げるパーシーの作品のうち、『縛を解かれたプロミーシュース』は1818年から1819年にかけて、『アトラスの魔女』は1820年8月に書かれている。従って、前に引用したメドウィンの記録は、これらの作品を創作する以前にパーシーが催眠術をかけられた経験があることを証明するものではない。グレイポーは『アトラスの魔女』の解釈においてメスメリズムの理論を強調しているが<sup>9</sup>、これに対してニューマン・I・ホワイトは「実際、非常に破壊的である」(“very destructive indeed”)と反論している。<sup>10</sup> ホワイトの言い分は、パーシーがメスメリズムについて知っていることの学問的証拠はメドウィンの言葉しかないということである。しかも、メドウィンは、パーシーは「それまでメスメリズムについて聞いたこともなく、私の論文を見せてやった」と書いている。『縛を解かれたプロミーシュース』は『アトラスの魔女』以前に書かれているので、この作品も問題外ということになる。これについて、ジェルピは、グレイポーが正しくホワイトが反論したことは誤りであるとしている。パーシーが「メスメリズムについて聞いたことがない」と言ったのは「フランツ・アントン・メスマーを知らないというつもりで言っただけかもしれない」し、パーシーは「一般的に動物磁気と、それがかけられた人間に及ぼす影響について多くの情報源から読んだり聞いたりしていた可能性が高い」と述べている。<sup>11</sup> また、ジェルピは、ノラ・クルックとデレック・ヴィトン<sup>12</sup> がパーシーの病歴を辿って調べた上でホワイトに反論していることにも言及している。

#### 4. 『詩の擁護』に見られるメスメリズムと想像力の類比関係について

パーシーは、詩論『詩の擁護』(A Defence of Poetry)の詩と社会改革について論じている箇所で、「動物磁気」の比喻を用いている。もし「詩」が滅びるようなことがあるならば、それ以前に腐敗が完全に人間社会の組織を破壊し尽しているに違いないと断言した後で、彼は次のように述べている。<sup>13</sup>

The sacred links of that chain have never been entirely disjoined, which descending

through the minds of many men is attached to those great minds, whence as from a magnet the invisible effluence is sent forth, which at once connects, animates and sustains the life of all. ( Underline mine )

< 試訳 >

その [ 詩の ] 鎖の聖なる環が完全にくずれ去ることは決してなかった。それは、多くの人間の精神を通して偉大な人々に受け継がれ、ちょうど磁石から眼には見えな  
い放射物が発散されるように、それは直ちにあらゆるものの生命をつなぎ、活気を与え、維持するのである。( 下線筆者 )

ここは、「動物磁気」と詩的靈感あるいは想像力との類比関係を論じた箇所であるが、まず、ここにはプラトンの『イオン』( )の中の、『詩神が詩人達を捉えると、「エウリピデスが磁石と呼ぶ石が持っているような」神性が彼の内部で動き出し、人々を引きつける磁力を彼らに授ける』のエコーがある。<sup>14</sup> この『詩の擁護』の中の一節に対してタートルは、「十九世紀の作家達にとって、動物磁気の発見は詩の霊的磁気を物理的現実に変えたのだった」とのコメントを加えている。<sup>15</sup>

また、同じく『詩の擁護』の中のダンテを論じている箇所、パーシーは詩的靈感について論じるにあたって、電気の比喩を用いている。

His [ Dante's ] very words are instinct with spirit; each is as a spark, a burning atom of inextinguishable thought; and many yet lie covered in the ashes of their birth, and pregnant with a lightning which has yet found no conductor.

( Underline mine )

まさに彼 [ ダンテ ] の言葉は生気に満ち溢れていて、一つ一つの言葉は不滅の思想  
の閃光、燃える原子のようであった。そして、その言葉の多くは、今もなお誕生の灰におおわれ、いまだに伝導体を見つけれずにいる電光をはらんでいた。

( 下線筆者 )

この箇所について、タートルは、「神的なものが訪れるという才能をあらゆる比喩として、磁気や電気は、ある意味で、メスメリズムと創造的意識の結合を準備したのである」と述べている。<sup>16</sup>

グレイボーによれば、パーシーはオックスフォード大学時代から当時の科学に強い関心を抱いており、彼の部屋には実験器具が散乱していたという。<sup>17</sup> 若い頃からパーシーは、想像力や詩的靈感のような人間の内面的・精神的な事柄を、磁気や電気といった物質的なものと同じレベルで考える習慣が身につけていたものと考えられる。

## 5. 女催眠術師ジェーン：ジェーン・ウィリアムズに寄せる抒情詩

### 女催眠術師から患者へ

「女催眠術師から患者へ」( ' The Magnetic Lady to her Patient ' ) は、おそらく1822年の作とされている。パーシーは晩年、友人エドワード・ウィリアムズの夫人ジェーンと親しくなった。ジェーンはギターを伴奏に歌を歌うことが上手で、パーシーは彼女の歌を聞くと恍惚境に誘われた。また、ジェーンはアマチュアであるが催眠術を知っていて、パーシーは頭痛や脇腹の痛みを和らげてもらうために、よくジェーンに催眠術をかけてもらっていた。ジェーンは、最晩年のパーシーにとって幸福と一時的な癒しを与えてくれる存在だった。また、パーシーはジェーンに対して恋愛感情をもっていた。

この詩は、パーシーが女催眠術師ジェーンに催眠術をかけてもらった時の体験を題材に扱っている。まず、第1連を引用する。<sup>18</sup>

“ SLEEP, sleep on! forget thy pain;  
My hand is on thy brow,  
My spirit on thy brain;  
My pity on thy heart, poor friend;  
And from my fingers flow  
The powers of life, and like a sign,  
Seal thee from thine hour of woe;  
And brood on thee, but may not blend  
with thine.

### < 試訳 >

「眠りなさい、眠り続けなさい！あなたの苦痛を忘れなさい。

私の手は、あなたの額の上に、

私の精神は、あなたの脳の上にあります。

私の憐憫は、あなたの心臓の上にあります、可哀想な方よ。

そして、私の指から流れ出ます、

生命の力が、そして封印の印のごとく、

あなたを不幸から守り、

あなたの上に立ち込めます、あなたの生命と

混じり合うことはありませんが。

ジェーンの治療には、磁気力や器具類は一切使用されていない。彼女は、専ら声と手を使ってパーシーの苦痛を和らげようとしている。彼女は、治療にあたって実際に手をパーシーの額に当てている。しかし、「私の精神は、あなたの脳の上にある」、「私

の憐憫は、あなたの心臓の上であり」との表現は、多分に心情的なものであり、心や魂による治療といった性格が強い。ただし、催眠術師の生命と患者の生命が交じり合うこととはないという。

続く第2連において、ジェーンはパーシーを眠りにつかせ、第3連で、自分の存在を含め、すべてを忘れるように彼に呪文をかける。その間もジェーンは、自分はパーシーを愛していないのでパーシーのものになることはできないと念を押している。

第4連では、ジェーンの催眠術がパーシーの心と体に及ぼす影響が歌われる。

“ Like a cloud big with a May shower,  
 My soul weeps healing rain  
 On thee, thou withered flower;  
 It breathes mute music on thy sleep;  
 Its odour calms thy brain!  
 Its light within thy gloomy breast  
 Spreads like a second youth again.  
 By mine thy being is to its deep  
 Possesst.

「五月の驟雨を孕んだ雲のごとく

私の魂は泣き、癒しの雨をあなたの上に  
 降り注ぎます、あなた、萎れた花よ。

私の魂は、あなたの眠りに沈黙の音楽を奏で

その香りは、あなたの脳を鎮めます！

その光は、あなたの憂鬱な胸の中に

青春が再び訪れたかのように広がります。

あなたの存在は、私の存在によって、その奥底まで

取りつかれているのです。

「萎れた花 (“withered flower”)」(l. 30) に喩えられたパーシーは、ジェーンのもたらす驟雨によって生命を吹き返す。ジェーンの魂、存在の核が「癒しの雨 (“healing rain”)」(l. 29)、「沈黙の音楽 (“mute music”)」(l. 31)、「香り (“odour”)」(l. 32)、「光 (“light”)」(l. 33) といった感覚イメージによって表現されている。グレイボーは、この詩の第4連2～7行目における女催眠術師の力は、『アトラスの魔女』の主人公の魔女が持つ資質や癒しの力と同じ性質のものであると述べている。<sup>19</sup>

最後の連は、催眠術をかけてもらった後のパーシーとジェーンの対話である。自分がいない時には、どのようにして痛みを和らげているのか尋ねるジェーンに対して、パー

シーは「私を殺すかもしれないものが、私を治してくれるでしょう (“What would cure, that would kill me.”)」(l. 42)と答えている。このせりふを伝記的事実に照らし合わせて解釈するならば、自分の根本治癒のためには腎臓の中の石を取り除く手術をすることが必要だが、そんなことをしたら自分は死んでしまうという意味になる。

ポール・A・バタラー口は、この詩の中心テーマについて次のように述べている：「この詩は、ジェーンは確かに彼女の指と声を通じて彼女の存在の最も本質的な部分を伝えているのだというシェリーの信念あるいは願望を強調している。しかし、シェリーを「悲しみの時」から開放することによって、ジェーンは彼の想像力を再び活気づけ、彼に（詩を）書く動機を与えているということも明らかである」。<sup>20</sup>

最後の行の「鎖」(“chain”)は、パーシーの「生命のきずな」であり、妻メアリーとの「結婚のきずな」を意味している。しかし、バタラー口によれば、“chain”と“Jane”の音の共鳴には、メアリーではなく「ジェーンとのきずな」を望むパーシーの秘かな願望が読み取れる。<sup>21</sup> ジェーンとのきずなが続く限り、自分の生命に関わる部分を失うことはないパーシーは信じているのである。

この詩におけるパーシーは、ジェーンの楽器、ギターのような存在である。パーシーの額に手を触れ、言葉がけをしながら催眠術をかけるジェーンと、ギターを爪弾きながら歌を歌うジェーンの間には、類比関係が見られる。「ギターに添えて、ジェーンに」(‘With a Guitar; To Jane’)の場合と同様に、この詩においては、ジェーンとパーシーの間には主従関係がある。僕としてのパーシーは、主人であるジェーンの手によって生きる力と想像力を回復させることができる。しかし、彼が自らの体験を昇華させることによって完成した詩の世界においては、この両者の主従関係は逆転する。

#### レリチ湾にて詠める詩

「レリチ湾にて詠める詩」(‘Lines written in the Bay of Lerici’)は、『生の凱旋』と同じ草稿の中に書き付けられており、D. H. レイマンによれば、死の2, 3週間前の詩である。<sup>22</sup> これは、自分のもとを去ったジェーン・ウィリアムズに対する思いが綴られた詩である。詩の冒頭でジェーンは、自分では光を発することのない月に喩えられる。一人残されたパーシーは、ジェーンが歌を歌ってくれたことや、催眠術をかけてくれたことを思い出している。この詩の15~24行目を引用する。<sup>23</sup>

She [ Jane ] left me, and I staid alone  
Thinking over every tone,  
Which though now silent to the ear  
The enchanted heart could hear  
Like notes which die when born, but still  
Haunt the echoes of the hill:



And feeling ever - O too much -  
The soft vibrations of her touch  
As if her gentle hand even now  
Lightly trembled on my brow; ( Underline mine )

彼女 [ ジェーン ] は私の許を去った、そして私は、ただ一人  
 耳には聞こえぬが  
 魅せられた心には聞こえる  
 一つ一つの調べに想いを馳せつつ、佇んだ。  
 その調べは、生まれてすぐ死に絶えるが、常に  
 山の木霊を訪れる調べに似ている。  
 そして今もなお、私は絶えず感じる - おお、おお、余りにも激しく -  
彼女が触れて伝えた優しい震えが  
あたかも彼女の優しい手が今も  
軽やかに私の額の上で震えているかのように思われる。 ( 下線筆者 )

この引用箇所は2行目「一つ一つの調べ」(“ every tone ”)は、ジェーンの歌声の回想である。耳には聞こえないが、心には聞こえてくるという。彼女の歌声は、生まれてすぐに消えてしまっただが、その後もずっとそのエコーが残っているのである。また、下線をほどこした最後の3行は、ジェーンに催眠術をかけてもらった体験の回想である。パーシーには、ジェーンが催眠術をかける際に、自分の額に手をあてた時の感触がまだ残っている。そして、ジェーンの手振動がパーシーの額に伝わる感触は、演奏者が楽器を演奏して振動を呼び起こす感触に似ている。

この詩の最後で、パーシーは広大な海原を滑るように進んでいく数隻の船を見つめている。35~44行目を引用する。

... I dare not speak  
 My thoughts; but thus disturbed and weak  
 I sat and watched the vessels glide  
 Along the ocean bright and wide,  
 Like spirit-winged chariots sent  
 O'er some serenest element  
 To ministrations strange and far;  
 As if to some Elysian star  
 They sailed for drink to medicine  
 Such sweet and bitter pain as mine.

・・・私は敢えて自分の思いを  
述べることはしない。しかし、かように心を乱され、気も軽く、  
腰をおろして、極めて静かな大気の上を  
不思議な遠い彼方の奉仕のために送られた  
空霊な翼をつけた車のごとく  
数隻の船が輝く広大な海原を  
滑り行く様を眺めるのだった。  
それらの船は、私の苦痛のように  
甘くて辛い苦痛を癒す薬を求めて、とある「樂園」の星へと  
向かって帆を張っているかのようだった。

この引用箇所の下から2行目の「樂園」の星は、一見『エピサイキディオン』  
(*Epipsychidion*) の樂園を想起させるが、この航海は飽くまでも苦痛を癒す薬を捜し求  
めるための航海である。パーシーはここで、樂園の星へと向かう数隻の船を、音楽と催  
眠術で自分を癒してくれたジェーンの存在を忘れることができずにいる自分自身に重ね  
合わせているのである。

#### 6. メスメリズムの媒介者としてのパンシア：『縛を解かれたプロミーシュース』

グレイポーは、『縛を解かれたプロミーシュース』は、1. 「革命的社會思想」  
("revolutionary social philosophy")、2. 「プラトニズムもしくはネオ・プラトニズ  
ム」("platonism or neo-platonism")、3. 「科学的思索」("scientific speculation")  
の3つの要素が融合して出来上がった作品であるとしている。<sup>24</sup>

グレイポーは、第2幕第1場におけるパンシアの機能に注目する。ここは、エイシア  
とパンシアが対話をする場面である。グレイポーは、もしエイシアがメアリー・シェリー  
の言うように「情熱的で創造的な愛」("passionate creative love") の象徴だとするな  
らば、パンシアは「共感的な愛」("sympathetic love") であろうと述べている。そし  
て、パンシアは、プロミーシュースが催眠術で彼女に吹き込んだメッセージをエイシア  
に伝達する使者の役目をになっているという。

プロミーシュースに催眠術をかけられた後のパンシアがエイシアに向かって言うせり  
ふを引用する (II. i. 71-89)。

I [ Panthea ] lifted them [ her eyes ] - the overpowering light  
Of that immortal shape was shadowed o'er  
By love; which, from his soft and flowing limbs  
And passion-parted lips, and keen faint eyes  
Steamed forth like vaporous fire; an atmosphere

Which wrapt me in its all-dissolving power  
As the warm ether of the morning sun  
Wraps ere it drinks some cloud of wandering dew.  
I saw not - heard not - moved not - only felt  
His presence flow and mingle through my blood  
Till it became his life and his grew mine  
And I was thus absorbed - until it past  
 And like the vapours when the sun sinks down,  
 Gathering again in drops upon the pines  
 And tremulous as they, in the deep night  
 My being was condensed, and as the rays  
 Of thought were slowly gathered, I could hear  
 His voice, whose accents lingered ere they died  
 Like footsteps of far melody. . . (Underline mine)

私は眼を上げました - 見ると、あの不死の姿の  
 大いなる光輝が愛の影におおわれて  
 いました。愛は、彼の柔和で流れるように伸びた手足から、  
 情熱的に半ば開いた唇から、激しいうっとりした眼から、  
 蒸気の火のように噴き出してきました。それは、  
朝の太陽の暖かい空気が、さまよう露の雲を飲み込む前に  
それを包んでしまうように、すべてを溶かしてしまう力の中に  
私を包んでしまったような雰囲気でした。  
私は何も見えず、聞こえず、身動きもしませんでした - ただ感じたのは  
彼の存在が流れ出て私の血液の中に混じり、  
遂にそれが彼の命となり、彼の命が私の命となったことでした。  
そのようにして私は吸い込まれてしまいました - やがて彼の存在は移ろい去って  
 太陽が沈む時の蒸気のように  
 松の木の上に凝集して水玉となって  
 震えるように、深まる夜の中で  
 私の存在は凝縮したのです、そして思想の光線が  
 ゆっくりと凝集していくにつれて、私には彼の声が  
 聞こえるようになりました。その声の調子は、完全に消え入るまでの間、  
 はるか彼方に聞こえる旋律の足音のように聞こえていました。 (下線筆者)

上の引用のうち、下線を施した部分がグレイボーが引用している箇所である。プロミー

シュースは、催眠術によりパンシアにメッセージを吹き込むが、パンシアはプロミーシュースが自分とコミュニケーションをとっていることにすら気づいていない。そして、エイシアは、あたかもプロミーシュースにかけられた催眠術による恍惚状態からパンシアを呼び覚ますかのように、パンシアの眼からメッセージを読み取っている。グレイポーは、この箇所を引用した後で、「こういった内容をドラマ化するために、シェリーが自分がある程度知識を持っているメスメリズムの手法を使ったと推測することは正当であると思われる」（“ It is a justifiable surmise, I believe, that in his dramatization of this conception Shelley employed the technic of mesmerism, of which he had some knowledge.”）と述べている。<sup>25</sup>しかし、『縛を解かれたプロミーシュース』に見られるメスメリズムに関するグレイポーの指摘はそこまでである。

バーバラ・C・ジェルピは、グレイポーの解釈を支持し、それをさらに敷衍して、以下のような解説を加えている。<sup>26</sup>

この引用箇所において、プロミーシュースはパンシアに催眠術をかけているのである。プロミーシュースの体から「体液」（“ fluid”）が流れ出して、彼の手足、「情熱的に半ば開いた唇」、「激しいうっとりした眼」から「蒸気の炎」が噴き出し、パンシアはたちまち無意識状態になり、プロミーシュースの意識と一体化する。しかし、プロミーシュースと一体化しながらも、パンシアには、自分とプロミーシュースは別個の存在（duality-in-unity）であるという意識が残っている。これは、典型的な催眠術師と患者の関係である。

グレイポーと同様に、ジェルピもパンシアはプロミーシュースから影響を受け、それをエイシアに伝える媒介者の役目をになっていると解釈する。そして、催眠術はそれを行う者と患者の間だけに成立するものではなく、両者の間にはいる媒介者を通じて行うこともできるとするジョセフ・デルーズの言葉を引用する。<sup>27</sup>つまり、ジェルピの解釈によれば、パンシアはプロミーシュースの影響により催眠状態に陥るが、その影響をエイシアの所まで持ち運んで、彼女がエイシアの手によって再び恍惚状態に入った時に、パンシアはプロミーシュースから受け取ったものをエイシアに伝えていることになるのである。

ただし、ジェルピによれば、エイシアは妙に扱いにくい媒介者で、エイシアは彼女に向かって、こう述べている（II. i. 108-110）。

Thou speakest, but thy words  
Are as the air. I feel them not. . . . oh, lift  
Thine eyes that I may read his written soul!

あなたは話しているけれど、あなたの言葉は大気のようにです。  
私には感じられません。眼を上げなさい。

記された彼の魂を読み取ることができるように。

ここで、エイシアがパンシアの眼からプロミーシュースのメッセージを受け取ろうとしている点に注意したい。何故なら、眼は催眠術で使われる重要な体の器官であり、催眠術の基本は、眼でじっと患者を見つめることにあるからである。

次に、エイシアが催眠術の媒介者であるパンシアの眼の中にプロミーシュースの姿を見ている場面を引用する（II. i. 119-126）。

There is a change: beyond their inmost depth  
I see a shade - a shape - tis He, arrayed  
In the soft light of his own smiles which spread  
Like radiance from the cloud-surrounded moon.  
Prometheus, it is thou - depart not yet!  
Say not those smiles that we shall meet again  
Within that bright pavilion which their beams  
Shall build o'er the waste world? . . .

変化が見えます。その眼の奥の奥に  
影が - 姿形が見えます - それは「彼」です。あの人の  
微笑みの柔らかな光に包まれています。その微笑みは  
雲に取り巻かれた月から出てくる光線のように広がってきます。  
プロミーシュースよ、あなたです - まだ去らないでください！  
その微笑みは、こう言っていませんか？その微笑みの光線が  
荒廃した世界に築くべき輝く天蓋の中で  
私達はまた会うのだと。 . . .

この場面において、プロミーシュースによる催眠術の影響は、媒介者であるパンシアを通じて完全にエイシアに伝わったことになる。そして、ここに至ってはじめて、エイシアはプロミーシュースの再生は自分の再生をも約束してくれるものであることを悟るのである。

『縛を解かれたプロミーシュース』の中心テーマを一言で要約するならば、それは、宇宙を統合し、調和の状態をもたらすものは「愛」であるということである。通常の意味でのアクションが極端に少ないこの詩劇において実現される最も重要な出来事は、別離の状態にあったプロミーシュースとエイシアの再会、再結合である。そのプロセスにおいて、パンシアは両者の媒介者として大変重要な機能をになっているのである。

## 7. 世直しの催眠術：『アトラスの魔女』

グレイボーは、パーシー・シェリーの『アトラスの魔女』における魔法はメスマーの催眠術と同じ性質のものであるとの解釈を示している。<sup>28</sup> それは、次の5つの点に要約される。

第1に、この作品の主人公が行使する魔法と「女催眠術師から患者へ」における催眠術は、類比関係にある。まずグレイボーは、第14～17連で紹介されるアトラスの魔女が所有する、次の4つの魔法の宝を確認する： 「空気の調べ (“ sounds of air ”) 」 (l. 154)、 「迅速で甘美で奇妙な夢達 (“ Visions swift and sweet and quaint ”) 」 (l. 161)、 「常に花咲くエデンの木々で出来た一種の鳥小屋で飼われている香り達 (“ odours in a kind of aviary / Of ever blooming Eden-trees ”) 」 (ll. 169-170)、 「晶明な器 (“ crystal vials ”) 」 (l. 182) に入った「透明で甘い酒 (“ liquors clear and sweet ”) 」 (l. 177)。その後、グレイボーは「女催眠術師から患者へ」の第1, 3, 4連を引用し、特に第3連19～20行目、第4連29～34行目はアトラスの魔女の才能や癒しの力の実践と明らかな対応関係があると述べている。

ここで、これら2つの詩に現われる類似した詩的イメージを確認すると、「空気の調べ」=音楽、「夢達」=眠り、「酒」=磁気水であり、いずれも催眠術に関係がある。また、「香り」も、両方の詩に共通して出てくるイメージであり、催眠術では脳を鎮める役割を果たす。

第2に、グレイボーはパーシー自身が催眠術を受けた経験があり、それが体に及ぼす効果をよく知っていたことを指摘する。そして彼は、「3. パーシー・シェリーと催眠術」の項で引用したメドウインによる証言を、その論拠としている。

第3に、グレイボーはアトラスの魔女は薬の神ミネルヴァであると指摘する。ローマ神話に出てくる女神ミネルヴァは患者の夢の中に現われ、病気を診断し、治療を行うとされる。ただし、『アトラスの魔女』における眠りの中のヴィジョンには、神話やメスマーの催眠術を越えたものがあって、例えば、眠りの中で魂がリアリティーを垣間見る、アトラスの魔女が眠りの中に人間の本性を見る等は、パーシーの詩の世界ならではのユニークな特質である。

第4に、メスマーの論文から数箇所引用した後で<sup>29</sup>、グレイボーはアトラスの魔女が持っている「晶明な器は、癒しの恍惚状態を誘うと考えられる磁気水の瓶に他ならない」 (“ the crystal vials are no more than the bottles with their magnetic waters supposedly inducing the healing trance ”) と結論づけている。『アトラスの魔女』第69連を引用する。

To those she saw most beautiful, she gave

Strange panacea in a chrystal bowl. . .

They drank in their deep sleep of that sweet wave -

And lived thenceforward as if some control  
Mightier than life, were in them; and the grave  
 Of such, when death oppressed the weary soul,  
 Was as a green and overarching bower  
 Lit by the gems of many a starry flower. (Underline mine)

魔女は、とても美しいと思った者達に、  
晶明な器に入れた不思議なパナケアを与えた・・・  
 彼らが深い眠りの中で、その甘い液体を飲むと -  
それ以後、彼らは生命よりも強力なある支配力が  
自らの体内に宿るかのごとく感じ、生きた。そして、  
 こうした者達の墓は、死がその疲れた魂を押しつぶした時、  
 星のごとき多くの花の宝石が  
 緑の丸天井をなす、あずまやのようであった。(下線筆者)

この連の下線部において、「とても美しい(“ most beautiful ”)」(l. 593)人々が「晶明な器に入った不思議なパナケア(“ Strange panacea in a chrystal bowl ”)」(l. 594)を飲むと「生命よりも強力な支配力が自らの体内に宿るかのごとく感じ、生きた」と述べられているが、グレイボーによれば、これは催眠術を行う者が患者に対して及ぼすコントロールの力である。ただし、メスマーの催眠術との相違点は、『アトラスの魔女』にあっては「パナケア」は生きている者だけでなく、死の眠りの状態にある者に対しても効力を持つという点である。その背後にあるのは、パーシーの主要な作品に共通して見られるネオ・プラトニズムの思想である。

第5に、メスマーによれば、動物磁気の干満は天体と調和した状態にあり、「惑星が人体に及ぼす影響」と「太陽と月が人間の体に及ぼす影響」とは類比関係にある。グレイボーによれば、この考え方は、そのまま『アトラスの魔女』の詩の世界に当てはまる。また、アトラスの魔女=ミネルヴァは、天空を支配する神である。従って、『アトラスの魔女』に見られる世界観とメスマーの世界観は、うまくつながってくるとグレイボーは主張する。

大変な読書家であったことでも知られるパーシーの作品には、いろいろな作家、哲学者、科学者等の思想や著作のエコーが散見されるが、『アトラスの魔女』という作品においては、メスマーの世界観、ニュートンの理論、ネオ・プラトニズムはお互いに矛盾しないというのがグレイボーの基本的な見方である。

以上のことを踏まえれば、第69～76連は、催眠術がいろいろな患者にもたらす様々な効果と解釈することが可能である。

まず、第69連でアトラスの魔女に「不思議なパナケア」を与えられた「最も美しい」

人々は、「彼らが深い眠りの中で、その甘い液体を飲むと - / それ以後、彼らは生命よりも強力なある支配力が / 自らの体内に宿るかのごとく感じ、生きた」とある。これは、既に述べたように、催眠術を行う者が患者に及ぼす支配力と完全に一致する。なお、この連の最後の3行における「最も美しい」人々の墓のイメージは、ネオ・プラトニズム的である。

次に、第72連からは、「あまり美しくない (“ less beautiful ”)」 (l. 618) 人々の脳にもたらず「奇妙な夢 (“ strange dream ”)」 (l. 617) が列挙される。「王」、「兵士達」、「刑務所の看守達」等の夢が語られる第74～76連を引用する。

#### LXXIV

The king would dress an ape up in his crown  
And robes, and seat him on his glorious seat,  
And on the right hand of the sunlike throne  
Would place a gaudy mock-bird to repeat  
The chatterings of the monkey. - Every one  
Of the prone courtiers crawled to kiss the feet  
Of their great Emperor when the morning came,  
And kissed - alas, how many kiss the same!

#### LXXV

The soldiers dreamed that they were blacksmiths, and  
Walked out of quarters in somnambulism,  
Round the red anvils you might see them stand  
Like Cyclopes in Vulcan's sooty abysm,  
Beating their swords to ploughshares - in a band  
The jailors sent those of the liberal schism  
Free through the streets of Memphis, much, I wis,  
To the annoyance of King Amasis.

#### LXXVI

And timid lovers who had been so coy  
They hardly knew whether they loved or not,  
Would rise out of their rest, and take sweet joy  
To the fulfillment of their inmost thought;  
And when next day the maiden and the boy  
Met one another, both, like sinners caught,



Blushed at the thing which each believed was done  
Only in fancy - till tenth moon shone;

< 試訳 >

74

王は、自分の王冠と衣を猿に着せ、この猿を  
自分の輝かしい王座に座らせ、  
陽の光のごとく輝く王座の右手には、  
派手な物真似鳥を止まらせて、  
猿のおしゃべりを真似させることを望んだ。 - 朝が来ると、  
ひれ伏す廷臣達が一人ひとり這い寄って来て  
偉大なる「皇帝」の足に接吻をした  
- ああ、何と大勢の人々がこの同じ人物に接吻をしたことか。

75

兵士達は、自分達が鍛冶屋になった夢を見て、  
兵舎より夢遊病患者のごとく歩み出た、  
ヴルカヌスの煤けた地獄の底にいる  
キュクロペス達のごとく、彼らが  
赤く焼けた鉄床の周りに立って、鋤の刃を鍛えている姿が見られた。  
- 刑務所の看守達は、教会分離派の囚人達を一まとめにして  
メンフィスの通りで釈放し、私の知るところによれば、大いに  
アマシス王の不興を買った。

76

とても恥ずかしがって、おずおずしていた恋人同士は、  
愛すのか、愛さぬのかを、ほとんどわきまえなかったが、  
それまでの情眠のごとき生き方を抜け出して、甘美な喜びを享受し、  
彼らの内奥の想いを成就させた。  
その翌日、この乙女と少年が顔を  
見合わせた時、どちらも捕えられた罪人のように、  
各々が空想の中でやったに過ぎぬと信じた秘め事を  
思い出して赤面した - やがて十ヶ月目が輝いた。

第74～75連において、「王」は自分の王冠と衣を猿に与え、「兵士達」は鍛冶屋になり、「看守達」は教会分離派の囚人達を釈放する。いずれも、虚栄や空虚なものを追及する者達が見る夢である。特に「兵士達」は、夢遊病患者に喩えられている。これらは、

行動によって自らの罪を暴露する告白的な夢になっているが、グレイボーによれば、それは催眠術によってはじめて可能となる。

第76連では、お互いに愛の告白もできないでいる若い恋人同士が夢の中で愛の行為に及び、その結果、妊娠10ヶ月を迎えるに至ったいきさつが語られている。グレイボーは、この連における出来事を、「強く想像したことが感覚と事物の世界で現実味を帯びる」(“ what is intensely imagined takes on actuality in the world of sense and matter ”) ことの一例と解釈している。

#### 8 . ルソーに催眠術をかける「全身光なる幻影」 - 『生の凱旋』

ルソーが、主人公である詩人パーシー・シェリーに、自分が「生」(Life)の車につながれるに至ったいきさつを語る場面で、未完の大作『生の凱旋』は大きな山場を迎える。そして、ルソーが語る寓意的な物語の解釈の鍵となるのが、「全身光なる幻影 (“ A Shape all light ”) 」(l. 352)である。これは、文字通りには水面に反射する太陽の光を指すが、その象徴的な意味に関しては、いろいろな解釈がある。

W. B. イエイツは、この「全身光なる幻影」を「明けの明星」<sup>30</sup>、P. H. バターは「この世における永遠の美の姿」<sup>31</sup>としている。D. キングヘリーは、「高い存在と神秘的な交渉を持ったと考える人々によって見られ、あるいは考えられる本質的なものであるが、それと同時に高い理想を抱く人々を導くように意図された光明」(“ the essence of what is seen or felt by those who think they have had mystic communion with some higher power, but it may also be intended to represent merely the guiding light of those who have high ideals ”) であるとし<sup>32</sup>、この幻影が高い理想を抱く少数の人々にのみ受容され得るものであることを強調している。また、「全身光なる幻影」を悪しきものと見なす解釈もあって、ハロルド・ブルームは「実践的悪意」(“ pragmatic malevolence ”) を持ったものとしている。<sup>33</sup>

D. H. レイマンによれば、この「全身光なる幻影」はJ. J. ルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712-1778) の『新エロイズ』( *La Nouvelle Héloïse* ) の主人公サン・ブルーの恋人ジュリーである。<sup>34</sup> ちょうど『新エロイズ』においてサン・ブルーの情熱の対象がジュリーであったように、『生の凱旋』におけるルソーの情熱の対象は「全身光なる幻影」である。さらには、パーシーは自分自身の危うさをルソーの中に見ているので、ルソーとジュリーの関係と『生の凱旋』執筆当時のパーシーとその恋人ジェーン・ウィリアムズの間には、強い類似性が認められる。以上のことから、筆者は、この「全身光なる幻影」をパーシーの理想美、愛の化身であるジェーン、あるいはそれに近い存在と解釈する。ちょうどパーシーがジェーンに催眠術で一時的に痛みを和らげてもらっていたように、ルソーは「全身光なる幻影」から癒しの治療を受けようとしたのではないだろうか。

『生の凱旋』の「全身光なる幻影」が登場する場面を引用する (ll. 352-359)。

“ A shape all light, which with one hand did fling  
Dew on the earth, as if she were the Dawn  
Whose invisible rain forever seemed to sing

“ A silver music on the mossy lawn,  
And still before her on the dusky grass  
Iris her many coloured scarf had drawn. -

“ In her right hand she bore a chrystal glass  
Mantling with bright Nepenthe; -

全身光なる幻影が、片手で地面に露を  
撒き散らしていた。あたかも、「曙」が  
眼には見えない雨を降らせ、苔の生えた芝生の上で

銀鈴のような曲をいつまでも歌い続けているかのようだった。  
そして前方の薄暗い草の上には、  
アイリスの色とりどりのスカーフが虹を描いていた。 -

彼女は右手に、きらきら輝くネペンテスが、なみなみと  
注がれた水晶のグラスを持っていた。 -

この場面で、まず気づくことは、「全身光なる幻影」が地面に撒き散らす露が「曙」が降らせる眼には見えない雨に喩えられている点である。この水や雨のイメージは、「女催眠術師から患者へ」第4連でジェーンがパーシーに降り注ぐ癒しの雨と同じ性質のものと同じことができる。一般的に言って、パーシーの詩の世界は閉じられたテキストであり、彼の他の作品に現われる類似した詩的イメージが同じ意味や内容をになっている場合が非常に多いが、それは、これらの詩の場合にも当てはまることである。

次に、透明な容器に入った磁気水のイメージに注目したい。文字通りには、ネペンテスは、古代人が使った苦痛や憂鬱さを忘れさせる薬である。ノートン版シェリー詩集の注において、レイマンは、このネペンテスは「ホメロスの『オデュッセイア』第4歌でトロイのヘレンがテレマコスに与えた苦痛、怒り、悲しみを解消させる薬」であると述べている。<sup>35</sup> ここで、前の項で取り上げた『アトラスの魔女』にこれによく似たイメージがあったことを思い出しておきたい。即ち、第17連に出てくる「水晶の器」に入った「透明で甘美な酒」である。これは、この後、この詩の第69連で「晶明な器にはいった珍しいパナケア」と言い換えられている。『アトラスの魔女』のパナケアにも『生の凱

旋』のネペンテスにも、完全に飲み干した場合には催眠術師が使う磁気水の効能がある。また、「全身光なる幻影」が出現する場面には忘却をあらわす表現が繰り返し現われているが、催眠術に忘却の効果があることは「女催眠術師から患者へ」の第3連からも明らかである。

しかし、カルロス・ベイカーによれば、『生の凱旋』においてルソーは「全身光なる幻影」が差し出した杯に唇を触れただけで中味を飲まなかった。<sup>36</sup>つまり、ルソーは重大な瞬間に勇気がくじけてしまい、思いを達成することができなかったのである。そのために、彼はたちまち俗世の影響を受け、「生」の車につながれてしまったのである。

最後に、催眠術でよく使われる音楽のイメージに触れておきたい。この場面で聴こえてくる音楽は、絶え間なく聞こえてくる自然界の歌声である。375～378行目を引用する。

And her feet ever to the ceaseless song

“ Of leaves and winds and waves and birds and bees

And falling drops moved in a measure new

Yet sweet, . . . (Underline mine)

そして彼女の足は、木の葉や風や波や鳥や蜂や

滴り落ちる水滴の絶え間なく続く歌声に合わせて、  
新しい甘美な調べの中を  
進んで行った。(下線筆者)

この引用箇所2～3行目における接続詞“and”の機能に注目したい。ここでは、わずか1行余りの中で“and”が5回も使用されており、朗読した場合に催眠的な効果を上げることが可能である。この場面において、「全身光なる幻影」はルソーに対して催眠術のような力を発揮しようとしていると考えられる。

この後、「全身光なる幻影」にネペンテスを飲み、のどの渴きを癒すように勧められて、ルソーは「露の降りる朝の生気を与える錬金術の魔法の杖が当たったしぼんだユリのように(“as a shut lily, stricken by the wand / Of dewy morning’s vital alchemy”)」(II. 401-402)立ち上がる。ここで、「魔法の杖」(“wand”)、「錬金術」(“alchemy”)といった魔法の縁語が使われていることに注目したい。また、「しぼんだユリ」(“a shut lily”)のイメージは、本稿の5で取り上げた「女催眠術師から患者へ」第4連3行目の「しおれた花(“withered flower”)」と同じ性質のものである。

しかし、ルソーは弱々しい唇でネペンテスに唇を触れたが中味を飲まなかった、即ち、「愛」を受け入れるための想像力を持たなかったために、自らの情熱や「内なる叛乱

(“ the mutiny within ”) 」 (l. 213) を鎮めることができず、「生」の腐敗の力の犠牲になってしまったと考えられるのである。

## 9. おわりに

以上、本稿で取り上げたパーシーの5つの詩作品は、創作年代上2つのグループに分けることができる。

『縛を解かれたプロミーシュース』と『アトラスの魔女』は、パーシーの創作意欲の最も盛んな1818年から1820年にかけての作品である。グレイボーによれば、『縛を解かれたプロミーシュース』、『アトラスの魔女』、そして「雲」の素材は同じ詩想の塊りから採られていて、『縛を解かれたプロミーシュース』のすぐ後に3日間で完成された『アトラスの魔女』には『縛を解かれたプロミーシュース』に盛り込むことのできなかつた素材が使われている。<sup>37</sup> これらの2つの規模の大きな作品の中心テーマは、人間の内面からの社会改革であるが、前者の主人公が全人類の運命を一身に背負ったプロミーシュースであるのに対し、後者の主人公は、悪人に罪の告白をさせ、善人に生きる力を与える、いたずら好きのアトラスの魔女である。『縛を解かれたプロミーシュース』に見られるメスメリズムは、人間社会の改革のために必要なプロミーシュースとエイシアの再会・結婚を促すパンシアが活躍する第2幕第1場に限定されているが、『アトラスの魔女』ではグレイボーがいろいろな角度から論証しているように、魔女が使う魔法そのものが催眠術の性質を帯びていて、彼女が人間界に降りてきて行使する魔法の成果の数々の記録がこの作品の最後の約4分の1(第57~78連)を占めている。

これに対して、ジェーン・ウィリアムズに寄せた2つの抒情詩と『生の凱旋』は、パーシーの死の年1822年に書かれている。人間社会の改革者としての意識は後退し、それに代わって一人の人間、詩人としてのあり方、幸福などに関心が向けられるようになる。

『生の凱旋』において、詩人は「生」の車につながれた古今東西の歴史上の人物達の悪徳や墮落の原因を見極めようとする。ここには、改革を提言あるいは実行に移そうとする若き日のパーシーの姿はない。むしろ、この未完の断片における詩人の主な関心事は、ルソーと同じ過ちを犯すことなく愛や想像力を正しく確実に把握するための方法を模索することにあるかのようなのである。そして、この物語詩後半の「全身光なる幻影」が出現する場面には、渴きや痛みを一時的な催眠の効果で癒そうとすることに対するパーシーの賛否相半ばする(ambivalentな)姿勢が見受けられる。「女催眠術師から患者へ」は、パーシー自身が催眠術をかけてもらった経験をもとに書いたユニークな詩である。この詩において、パーシーはジェーンの催眠術によって生きる力と想像力を回復し、一篇の詩を書き上げることに成功した。ここに至って、彼が以前に『詩の擁護』の中で論じた「動物磁気」と想像力のアナロジーを自らの体験として再認識したであろうことは想像に難くない。

中期から最晩年にかけて、パーシーの関心が社会的な事柄からパーソナルな事柄へと

移行していくプロセスにおいて、メスメリズムの問題は、一層この詩人にとって身近な事柄として認識されるようになっていったと考えられるのである。

<注>

- 1 Carl Grabo, *Prometheus Unbound: An Interpretation*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1935. Carl Grabo, *Meaning of the Witch of Atlas*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1935.
- 2 マリア・M・タートル著、鈴木晶訳『魔の眼に魅されて - メスメリズムと文学の研究』国書刊行会 1994, p. 24. ( Maria M. Tatar, *Spellbound: Studies on Mesmerism and Literature*, Princeton U. P., 1978. )
- 3 Franz Anton Mesmer, *Mémoire sur la découverte du magnétisme animal*, Paris: Didot, 1779.
- 4 ジャン・チュイリエ著、高橋純、高橋百代訳『眠りの魔術師 メスマー』工作舎 1992, pp. 74-92. ( Jean Thuillier, *F. A. Mesmer ou L'extase magnétique*, Editions Robert Laffont, S. A., Paris, 1988. )
- 5 モーツァルトの『コジ・ファン・トゥッテ』第1幕第16場において、医者に扮装したデスピーナは、砒素で自殺をはかったフェルランドとグリエルモをメスマーの磁石で生き返らせる。(小瀬村幸子訳『コシ・ファン・トゥッテ』オペラ対訳ライブラリー 音楽之友社 2002, pp. 76-84. )
- 6 Thomas Mediwin, *The Shelley Papers: Memoirs of Percy Bysshe Shelley*, London, 1833, pp. 269-270.
- 7 *Ibid.*, p. 271.
- 8 Barbara C. Gelpi, *Shelley's Goddess: Maternity, Language, Subjectivity*, Oxford U. P., 1992, pp. 230-231.
- 9 *Meaning of the Witch of Atlas*.
- 10 Newman I. White, *Shelley* 2 vols, New York: A. A. Knopf, 1940, II p. 598.
- 11 *Shelley's Goddess*, pp. 179-180.
- 12 Nora Crook & Derek Guiton, *Shelley's Venomed Melody*, Cambridge U. P., 1986.
- 13 パーシー・シェリーの作品のテキストには、*Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts Criticism*, ed. Donald H. Reiman, W. W. Norton & Co., 1977. を使用した。ただし、この選詩集に掲載されていない「女催眠術師から患者へ」に関しては *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, eds. Roger Ingpen & Walter E. Peck. 10 vols. Gordian, 1965. を使用した。また、引用箇所日本語訳は、すべて筆者によるものである。
- 14 *The Dialogues of Plato*, trans. B. Jowett, 2 vols., New York: Random House, 1937, vol. I, p. 289.
- 15 『魔の眼に魅されて - メスメリズムと文学の研究』 p. 287.
- 16 *Ibid.*, p. 287.
- 17 Carl Grabo, *A Newton among Poets: Shelley's Use of Science in Prometheus Unbound*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1930, pp. 3-13.
- 18 パーシー・シェリーの「女催眠術師から患者へ」のテキストには *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, eds. Roger Ingpen & Walter E. Peck. 10 vols. Gordian, 1965. を使用した。
- 19 *Meaning of the Witch of Atlas*, p. 93.
- 20 Paul A. Batalaro, *Shelley's Music: Fantasy, Authority, and the Object Voice*, Ashgate, 2009, p. 112.
- 21 *Ibid.*, p. 114.
- 22 *Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts Criticism*, p. 452.
- 23 「女催眠術師から患者へ」以外のパーシー・シェリーの作品のテキストには、*Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts Criticism*, ed. Donald H. Reiman, W. W. Norton & Co., 1977. を使用した。
- 24 *Prometheus Unbound: An Interpretation*, p. 10.
- 25 *Ibid.*, p. 53.
- 26 *Shelley's Goddess*, pp. 178-188.

- 27 Joseph Deleuze ( Trans. ) Thomas C. Hartshorn, *Practical Instruction in Animal Magnetism*, New York: Appleton, 1843, p. 184.
- 28 Carl Grabo, *Meaning of the Witch of Atlas*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1935, pp. 91-105.
- 29 Franz Anton Mesmer, *Memoires et Aphorismes de*, Supplementary to *Physiologie et Hygiène du Magnétiseur*, par J. J. A. Ricard. Paris, 1844.
- 30 W. B. Yeats, *Essays and Introduction*, London: Macmillan, 1961, pp. 89-90.
- 31 Peter H. Butter, *Shelley & Idols of the Cave*, Edinburgh, 1954, p. 145.
- 32 Desmond King-Hele, *Shelley: His Thought and Work*, London: Macmillan, p. 353.
- 33 Harold Bloom, *The Visionary Company: A Reading of English Romantic Poetry*, Cornell U. P., 1971, pp. 360-361.
- 34 Donald H. Reiman, *Romantic Texts and Contexts*, Columbia: Univ. of Missouri Press, 1987, pp. 289-320.
- 35 *Shelley & Poetry and Prose: Authoritative Texts Criticism*, p. 465.
- 36 Carlos Baker, *Shelley & Major Poetry*, New York: Russell & Russell, 1961, p. 267.
- 37 *Meaning of the Witch of Atlas*, p. 3.

本稿は、イギリス・ロマン派学会第37回大会（於 山梨大学甲府西キャンパス、平成23年10月23日）における研究発表の原稿に手を加えたものである。

（平成23年10月31日受付、平成23年11月11日受理）

